

参考説明1

島田 基正

「上田城の天守閣は太郎山」

真田が何故二度も徳川の大军に打ち勝ったのか―自然と人間の地域総力戦だったから。

上田城は徳川の江戸城、豊臣の大坂城、黒田官兵衛の姫路城等に比べその城跡の大きさは比較になりません。しかし「真田魂」は自然との共生の中から万年と受け継がれてきた日本人の「心と魂」です。上田城は周りの自然の全てが要塞でした。天守閣は北側正面の太郎山でした。太郎山系、染谷台、東山、独鉦山等周りの丘や里山に全て出城や砦を築き千曲川、神川、矢出沢川等川や池を堀や塹壕に利用し敵に立ち向かいました。真田一族は雨が少なく乾燥している平地の少ない地域の自然環境を知り尽くし、日頃から地域の気候風土の特色を生かした産業文化を育てました。時には灌漑用水路やため池、治水事業等自然の脅威にも立ち向かいました。地域の民百姓と共に地域の共通する社会資本を共に整備する中で価値観を共有し心を通じて来ました。地域のリーダーとしての治世は人や自然等里山の力を最大限に活かしました。平安奈良時代から戦国時代まで日本での戦いは武士だけの戦いでした。民百姓は勝った方に年貢を納めれば、そこに暮らし続ける事が出来ました。大陸の様に民族同士の皆殺しの争いでなくやぐざの縄張り、言わば陣取り合戦でした。寺社等は両方から起請文を貰っていました。真田の10倍の徳川軍を二度も打ち破った真田一族の上田合戦は、戦国時代の常識では考えられない時の大勢力徳川の大军にも怯まず、民百姓、地頭、寺社等上田地域の総力が大軍に立ち向かったのです。二度も破れた徳川はこの「真田魂」に象徴される上田地域の風土の魂を江戸時代に

入っても中央政府に逆らう反骨の拠点になると恐れ歌舞伎や落語まで真田を語る事を禁止しました。上田藩の隣地丸子や坂城を幕府直轄地として江戸末期まで監視させた程です。薩長の明治政府に至っては戦国時代から日の本一の兵として「真田魂」を認めていただけに、中央集権化した明治政府に逆らう反骨のシンボルになると上田城の解体を命じたほどです。

城跡を殆ど買い取り地域の心と魂を宿している上田城を守つてくれた丸山平八郎その人も「真田魂」が大きく宿っていた人であつたと思います。

地域の心と魂が宿る神社を造るように、本丸跡地を寄付し、今に至る真田神社を残してくれたお陰で上田城跡は辛うじて守られてきました。殿様も民百姓も一つになって地域を造り守っていただけに、殿様が逆境にある時には皆が結束して立ち向かう地域なのです。この気質は地域固有の気候風土が育てた反骨の気質です。

雨が少ない乾燥した気候と平地の少ない中山間の里山風土は植物には雨の多い地域に比べ逆境です。植物は必死に生きようと地中深く根を張り逆境に立ち向かいます。土の力が無く乾燥砂漠の植物は子孫を残そうと虫や鳥に好かれる様に、花は美しく、生命力溢れた味濃い実がなります。生命力のある上田地域の桑の葉は強く光沢がある日本一世界一の天の虫、蚕の品質を育てました。太郎山、東山、独鉦山、四阿山が日本有数の薬草の山であるように、日本列島の典型的な上田地域の里山は地球の生命体が地球誕生以来受け継いできた共生の意識「和の心」を育てる力を持っています。上田城築城時代この地域は人も自然も生命がつながり一つの塊だつたと思います。これこそが行き詰まった地球と人類のあり方を教えてくれる日本世界の発信拠点だと思えます。